

118. スギザイノタマバエの生態について

九州大学農学部 汰 木 達 郎
 中 島 誠
 荒 上 和 利

スギザイノタマバエの生態については前報で一部報告しているが、本報では、昭和40年6月から昭和43年10月までの3年間の調査結果をもとに、スギザイノタマバエの成長の状態を検討してみることにした。

調査林分

調査林分は前報と同じである。

調査方法

林分中から10本を無作為にえらび、各調査木より15~30日おきに10×10cmの樹皮を剝離し、幼虫、サナギ、ヌケガラ、および死虫数を調査した。また、昭和42年10月からは、1週間おきに、各調査木の地上より約2mの位置からハエトリリボン(3×75cm)を吊り下げ成虫数を調査した。

結果および考察

3年間の幼虫、サナギ数は図1に示すとおりである。

また、昭和42年9月から昭和43年10月までの成虫数の調査結果は、表1に示す。これを幼虫、サナギ数と比較すると、図1の点線で示したようになる。

幼虫、サナギ数は、樹皮10×10cmの10ケの合計であり、成虫数は、ハエトリリボン3×75cmの10ケの合計である。

これから、幼虫(赤)の減少とサナギの増加、サナギの減少と成虫の増加、また成虫の減少と幼虫(白)および幼虫(赤)の増加の如く各々密接な関係がある。また、図1からわかるように、5月中旬からサナギの増加をみ、幼虫(赤)の減少をみることに、また冬季(12月~3月)成虫の発生をみないことから、冬を越してきた幼虫(赤)がサナギに成

長したものとみてよいと思う。また、6月に入りサナギが減少し成虫が急激に増加しているのは、梅雨時の湿度の上昇によりサナギが羽化したものであろう。7月始めに赤色の幼虫は最低となり、一方白色の幼虫が次第に増加しているが、このことは6月下旬から7月上旬にかけて羽化した成虫が卵を産みつけ、それがふ化したことを示すものであろう。また、8月には、幼虫(赤)が急激に増加するが、8月下旬には、その数を減少し成虫が再び増加をしはじめ、9月中旬に最高に達している。これは夏季の高温多湿により成長期間が短縮され再度のピークを示したものとと思われる。昭和42年度においては、8月から9月にかけての成長の発生には、幼虫(赤)の減少との関係がはっきりしなかった。

また、9月下旬から10月にかけて、幼虫(白)の増加をみることから、9月中旬に成虫が再び卵を産みつけこれがふ化したのであろう。昭和42年の場合、8~9月にかけてこの多数の成虫発生にもかかわらず、幼虫(白)の増加をほとんどみなかった。このことは、8~10月にかけての異常乾燥(図1の月間降水量を参照)

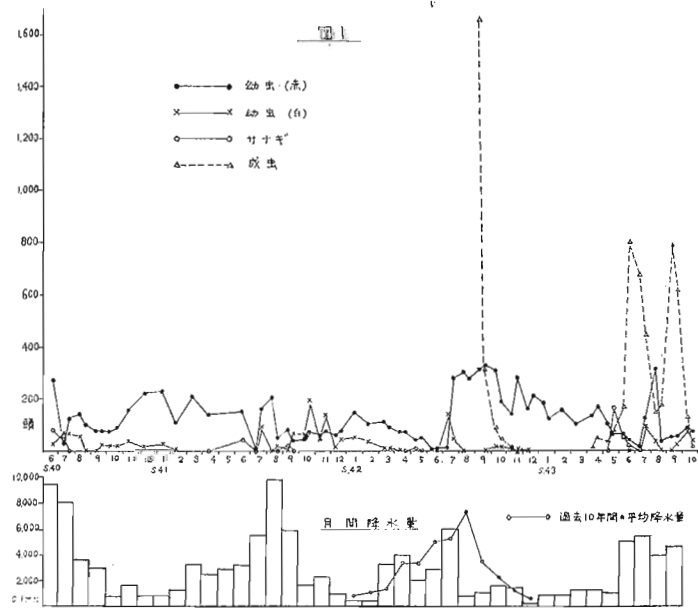


表 1

年 月 日	成 虫 数	年 月 日	成 虫 数
42. 9. 6	1,511	43. 5. 3	22
13	1,815	10	52
20	502	17	86
27	149	24	67
10. 4	144	31	62
11	48	6. 7	126
18	71	15	216
25	28	21	616
11. 1	15	30	1,016
8	12	7. 6	866
15	4	13	510
22	16	20	529
29	0	31	377
12. 6	0	8. 7	151
		15	156
		23	127
成虫発生なし		30	229
		9. 7	586
		15	1,008
43. 4. 5	8	27	621
12	19	10. 7	197
19	14	15	65
26	88	23	20

が関係しているのではないかと考えられる。10月を過ぎると成虫は次第に減少をはじめ、12月には、ほとんどその発生をみない。

したがって、12月～4月までは、幼虫のままで過ごすものと思われる。成虫数の調査は、現在のところ1年間だけしか行なっていないが、スギザイノタマバエは、以上のような周期をくりかえすものと思われる。